

# 「矢作川研究」第17号の発刊にあたって

豊田市矢作川研究所 所長

柴田一美

矢作川研究所は「豊かできれいな水の回復と人々にうるおいとゆとりを与える矢作川を目指す」を理念として平成6年に設立されました。現在18年目を迎え、その間、流域を対象に生物の調査・研究はもとより、河川環境、水源林、川の文化など多岐にわたって研究を行ってきました。その成果を市の各事業課や河川管理者へ情報提供・提言、そして所報・シンポジウム等を通して多くの市民に広報してきました。

研究所の研究スタンスも設立当時から少しずつ変わってきました。近年、市民活動の中でしばしば「協働」の言葉をよく耳にします。流域の環境保全活動における協働とは、それは、行政とたがいに協力・連携して自然豊かな川づくりを実践している人々や流域環境の保全に取り組んでいる人たちと、それぞれが持つ特性を生かしながら、補完し合い、協力しあい課題を解決していくことであります。例えば、市民団体の森林塾、若手釣り師、学生、漁業協同組合、そして河川管理者等との協働による外来生物オオカナダモの駆除。あるいは新設校建設に伴う地域のみなさんと共に学校づくりを推進する活動プロジェクトへの参画などがあります。それ以外にも市民との係わりとして小中学校の総合学習や地域の活動団体の環境教育などに専門的立場でアドバイスをを行っています。

研究所は今後こうした市民活動と共に実施する研究の分野が年々増えていくでしょう。しかし、そこには大きな問題があります。それは協働事業推進の傍ら、ややもすると時間的制約から研究員一人ひとりのスキルの低下をまねかねない事と、研究機関としての研究所の存在価値を認める認識の低下であります。市民貢献も含めた研究所の新たな課題として早急に取り組む必要があります。

さて、今年も矢作川における生物の調査・研究成果だけでなく、流域の自然・社会に関する報告や保全活動の紹介を盛り込んだ所報「矢作川研究」第17号をお届けすることができました。今回は特集として「枝下用水史」を採り上げました。本報告は、平成20年度よりスタートし5年計画の4年分をまとめたものであります。矢作川流域の治水や利水といった水をめぐる歴史や生活文化を約120年間におよぶ枝下用水史を通してみた矢作川流域環境を紹介しています。特に枝下用水の農業生産ではない別の価値も感じていただければ幸いです。本誌は、これらの成果を含む平成23年度から平成24年度に実施した研究を報告書としてまとめたものであります。

現在、矢作川研究所は豊田市が全国に誇るに足る研究所として着実に成果を上げておりますが、まだまだ研究員の研究成果を他の研究者や市民へ十分にアナウンスが出来ていません。この所報「矢作川研究」に研究員全員の研究成果とそのための地道な活動をもっともっと伝えていきたい。と同時に今までと違った刺激的な所報づくりにも挑戦してみたいと思っています。

今後も引き続き多くの皆様の限りないご支援とご協力をお願いします。